近世演劇雜考

目次

淨るりの「形式」と淨るりの「風」……一

一、形式と「風」との意味――「風」が操全體を支配し――技巧が操の總てゞある――風は操の生命線

二、淨るり五段組織が提唱された徑路――十二段から六段が最初の形式――次が五段組織――古淨るりと當流――謠曲と淨るりの關係――加賀の正本と謠曲のゴマ――五段と西洋劇詩の關係――『竹豊故事』の記載――『雲錦隨筆』の記載――千賀太夫の謂ふ「語りやうの心得」――能の五段組織說

三、序破急の本來の面目――言葉の意味――『學習條々』

四、机上の空論としての『忠臣藏』の五段組織――黑木氏の誤れる五段還元法

五、正しく實際の舞臺に卽した『忠臣藏』の五段組織への還元――書卸し當時の分割――後世の分割

六、「段」と「場」との淨るりの位と「立端場」の意義――テクニックの説明――術語に內在する藝術的の根本義
七、各段の趣向とその語り口――各段の目安――その語り口――『音聲互細秘抄』から
八、五段組織の原則が確立するまで――淨るりの本體は時代物――一線を劃する『出世景清』――「風」の發生――西風東風――政太夫節の大成は『國姓爺合戰』――その五段組織――立端場の存在
九、『夏祭浪花鑑』の一例――その五段組織――玉島の段の異例
十、淨るりの「風」といふ事――「風」は各段各場の格式也――「播磨地」――「駒太夫風」――「宮守酒」の一例――「沼津」の一例――端場と小揚――淨るりの藝術價値――淨るり批判の客觀性……四九

人形三人遣ひの源流

人形の遣ひ方――突込遣ひ――三人懸りの始――その記錄――山本飛驒掾――飛驒は何人――『棠大門屋敷』の記載――人形遣ひの受領――片手人形の樣式の發見――古評判記の記載――飛驒の系列――吉田三郎兵衛――吉田文三郎――『例冠雜誌』の記載――片手人形の樣式を認めて三人懸りの記載の再吟味――『北條時賴記』の畫證――『愛染明王影向松』の再吟味――人形の大さ

「操」における「人形」の研究……六七
一、人形の種類と、こゝでの研究する範圍――操の古い意味――人形の種類――その特質――人形の分類
二、「突込」と「片手」との人形二樣式――二つの樣式の特質――突込人形と人形舞臺の構造――片手人形と飛騨掾――人形細工人として――人形遣として――淨るり作者として――その樣式――「片手人形」といふ言葉の變遷――片手人形――手妻人形、碁盤人形の意味――「人形に足を付けた」といふ意味とその解釋
三、人形の二樣式は胎生期の昔から――『雍州府志』の記載と「人倫訓蒙圖彙」の異つた二つの畫證――『好色一代男』の上幕つらかくしの意味
四、「三人遣」の源流は「片手人形」――三人遣ひで記憶すべき近本九八郎の『時頼記』出演
五、「三人遣」の工夫者は桐竹門左衛門と近本九八郎――偶然の機會の工夫――丸胴から助手へ
六、人形機構の工夫と肩板の發生――記載のない肩板に注意を向けよ
七、吉田文三郎その他名人藝――現在の舞臺に殘る片手人形の余孽――それは「ツメ」の人形

吉田文三郎の初代と二代……九七
人形の大成者——『人倫重寶記』の記載——その畫證——文三郎の生立——文三郎五度の反逆——座本竹田近江の弱腰——文三郎の一生涯の生活の目安——文三郎の給金に近松の給金を加算——文三郎の死期死因の疑問——二代の文吾——その墓碑——名譽の景事——傳統の便りなさ

人形遣ひが臺詞を言うた時代……一二七
チョボの嚆矢——人形遣のひ辭——角太夫の『大念佛七萬日詣』

淨瑠璃雜話……一三三
故なき古格の破潰——「酒屋」のアトの問題——サハリとクドキ——その正しき意味——その實例
床本の質入——織太夫の「牢屋」——入質の證文——その床本——左官の綱太夫——街に起つた逸話——綱太夫目の上のコブ——『佐倉曙』の價値——新作と作曲の問題——綱太夫の土佐の「牢屋」の人氣

勾欄雜話……一三九
文樂を見に行く——その言葉の意味と時代の變遷——大衆は耳よりも目——竹本座更生の寶永二年の事實——突込人形と片手人形——「ツメ」の人形——三味線の發達——糸の目方——三絃工石村東助の工夫——鉛ゴメの駒——撥皮——團平の前後の二期——改革と保守——境目は明治十四年十一月——越前風と駒太夫風——美しい大衆の耳——越路と團平の分離

文樂夜話……一六三
傳說的の團平の藝——家庭人としての團平——經濟的に見た團平——團平後妻ちか女との馴れ染め——太夫と人形遣の見解の相違——津太夫の帶屋と玉造時代——名人辰五郎——その藝幅——紋十郎の出世藝——文五郎の『太十』の型——名人喜十郎——と、その槍——吉田錦糸の『古八』——人形部屋の符牒——ゲンマの仕掛物

勾欄雜考……一八三

淨るりと劇場の構造――東京人と淨るり――義太夫はヤボ――五代目春太夫の話――大隅太夫の非常識――攝津の土佐興行――江戸庄の割腹――その追善興行――鶴澤重造の先代――文樂座の玉筋の系圖――初代玉造の狐

豐澤團平の研究……二〇一

淨るりの研究は近松ばかりでは分らぬ――『壼坂』の出來るまで――その原作と第一回の原作――この作の枕の作者――團平の古い淨るりに對する對度――風の發生と推移――團平越路分離の奥に潜める事情――その記錄の語るところ

淨るり「曲風」の發生と、今日批判の標準……二三九

古典の繰返へし反復――「標準の耳」――風の成立から觀て――竹澤權右衛門の晩年からの推考――「沼津」の作曲の實例――この作曲の歴史を知らずして批判がなるか

『久右衛門日記』に讀む操史の貴重資料……二四三

尾戸燒の陶工久右衛門の日記の發見――御振舞、酒奉行の記事――太夫の連名――伊勢大掾の通稱――「さつま」と「江戸さつま」――「小平太」とは？――「熊野」は紀州でなく堺の熊野町――島津侯と堺の關係――島津と薩摩太夫の關係――人形品目の不審――淨るりの立て方――狂言の配置

院本『八百屋お七江戸紫の存在』……二五七

大阪圖書館の『江戸紫』――紀海晋の『八百屋お七』の再吟味――『戀緋櫻』と同一？別の入本？――竹本喜太夫の檢討――竹澤權右衛門――『江戸紫』の刊記と太夫連名の教ゆる事實――辰松八郎兵衛座の興行――二代の八郎兵衛――『音曲猿轡』の記載――手妻太夫の意義

「揚卷助六」心中の系統……二七七

『大阪助六心中物語』の存在――この書の特異の五點――この書の形式――「揚卷助六」と呼ぶ物語の從來に知られたる十點――『千日寺心中』の存在――『蟬のぬけがら』との相違點――『大阪助六』の心中みちゆきの全文――『千日寺心中』の竹本內匠利太夫とは？――「揚卷助六」心中系統一覽

「天和三年」と刊記せる脚本『浮かれ狂言』の存在……二九三

守隨氏のいふ『好色傳授』――『浮かれ狂言』の體裁――この書の口上――作者山本遊學――場割――役人付――「讀む脚本」？――『好色傳授』との比較――筋――ト書形態――チヨボの嚆矢？――その說經節の本文

異本『傾城佛の原』……三一七

內田魯庵氏の愛藏本――近松の『佛の原』――異本との比較――俳優替名――水島四郎兵衛とは何者？――『役者略請狀』の記載

「鳥熊」の春木座興行の記錄……三二九

鳥熊の素性――東京春木座の新興行法の實施――その興行月表――「春木座の規則」――再度の興行月表――役者の出入――鳥熊の沒落理由

舞臺照明に電光を用ゐた始……三四七

明治十七年五月道頓堀の中の劇場――發動機は千日前の竹林寺に――その宣傳文――『鬱蔚華咲方』

の歌詞――囃子の發達

日本最初の沙翁劇の番付について……三五七

明治十八年五月の道頓堀戎座の『ベニスの商人』の飜案『何櫻彼櫻錢世中』――シャイロックは中村珀琥郎

都萬太夫その他……三六一

都萬太夫の素性――『可盃』の記載――萬太夫の口宜案――『道成寺』の道行――佛の原の後日

―目次・終―